

バドミントンルール改正における選手への精神的影響の検討と提言

Research on the mental effects of players by changing rule of Badminton and proposal

1 K 0 3 A 1 1 0 - 9 清水陽子

指導教員 主査 関一誠先生 副査 加藤清忠先生

【目的】

I. B. F. (国際バドミントン連盟) は 2006 年 5 月 6 日、第 26 回年次総会において従来のサービス権あり 15 点制から変更し、ラリーポイント制の導入を全会一致で正式に決定した。ラリーポイント制は男女の単複とも 1 ゲームが 21 点 2 ゲーム先取となり、これまではサービス権を持つ側のみ得点のチャンスがあったが、サービス権に関わらず 1 プレー毎に必ず得点が動くようになった。そのため常にポイントが動く緊張感、そして試合時間の短縮からバドミントンはテレビ中継にマッチしたスリリングな競技へと大きく変化しようとしている。そこでルール変更後、初めて参加した試合において、試合直前と試合直後における選手の精神状態を分析し、ルール変更が選手の精神面にどのような影響を与えたかについて検討したいと考えた。

【方法】

大学生の公式戦で初めて新ルール (21 点ラリーポイント制) が取り入れられた、東日本学生バドミントン選手権大会において任意に抽出した男子 19 名、女子 17 名に以下のアンケート調査を試合の直前、直後でそれぞれ行った。

具体的に調べる項目は、①体力面に対するイメージ②自分のプレースタイルに対するイメージ③試合への不安感④試合開始後の戦略⑤デュースシステムに対するイメージ⑥コーチングシステムに対するイメージ⑦任意に指定した状況における考え方⑧インターバル時間に対するイメージ⑨サービス権の取捨の考え方⑩その他 (成績など)

【結果と考察】

試合直前はラリーポイント制にルール改正して初めての試合だったことから、イメージが先行し不安になる選手が多かった。精神面については、ラリーポイントを経験した選手から「全く違う展開」「あっさり終わってしまう」などと言われていた為、従来のサービス権あり 15 点制との差に対する不安を感じていた選手が多かった。体力面に関してもきついという選手が多かったが、実際に試合をした後では精神面、体力面でどちらにおいてもサービス権あり 15 点制とさほど大きな差が感じられなかった。

ゲーム開始時のサービス権の取得についても、単複共にサービス権あり 15 点制ではサービス権を取得していた選

手もサービス権を取得しないと考えた選手が多かった。しかし、実際の試合ではサービス権を取得する選手がほとんどで、旧ルールと同じような戦術でいくことに変更していることから、サービス権取得の面でもラリーポイント制に変わったことによる影響はほとんどないと考えられる。

しかし、試合終盤、相手が 18 点の時どのくらい離れていたかそのゲームを負けると思うかという質問では、試合直前よりも直後の実感が、より点差が離れていることへの危機感が強いという結果が出た。これは選手たちが負けている際、点差を敏感に感じやすいということが考えられ、この面では選手への影響があると考えられる。

【結論】

サービス権あり 15 点制から 21 点ラリーポイント制にルール改正されたことによる選手の精神面の影響はほぼ無いものと言える。これはラリーポイント制に変わったとはいえ、得点方式が変わっただけでバドミントンの競技特性は変わっていない為と考えられる。ただし、終盤の負けている場合の点差は選手が敏感になりやすいと考えられる。

精神面ではルール改正による影響はあまり見られなかったが、男女で差が表れた。これは男女の筋力差によるスマッシュなどのショットのスピードの違いにより、主に使う戦法が違っていることが原因であると考えられる。男性は番狂わせも起きやすいので、選手も不安になりやすいと考える為、指導を行う際はその不安を取り除くように指導をし、不安をなくすようにすべきである。また、序盤から全力を出す選手が多いので試合前のアップをしっかり行い、全力を出せるように準備しておくべきである。女性は不安を感じにくい傾向があり、ミスをしないことが選手にとって重要になってくるので、練習時にはラリーをつなぎミスを少なくする練習を行うべきである。また、女性はゲーム中のコーチングシステムを大事に考えることから、指導者は積極的にアドバイスすべきである。

サービス権あり 15 点制から 21 点ラリーポイント制にルール改正されたことによる選手の精神面の影響は、選手自身が想像していたよりも小さい。しかし、男性では精神面に与える影響が多少あると考えられるので、悪影響がある部分では選手たちが対応できるように練習し、指導者は選手たちへの影響面を考えながら指導すべきでもある。